

Title	社会思想家としてのウヰリアム・モリス (五)
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.11 (1921. 11) ,p.1507(95)- 1521(109)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211101-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は「capitalの利潤」にあらずして「stockの利潤」である。(五四頁) また第九章は「stockの利潤に就いて」である。只一個處に於いて除外とも思はれるものがあるのは、「社會の capital stock」「大不列顛の capital stock」が「國の stock」と同じ意味の言葉として突然に現はれるところである(九五頁)。capitalといふ言葉は個人事業に關係したときに用ひられるのみである。然し physiocrats が “advances” 及び “capitaux” といふことを論じ、且つその生産的並びに不胎的勞働の説をなのは、スミスをして更に進みて stockの本質を研究せしめたやうである。その結果は第二卷の「stockの本質、蓄積並びに使役」といふ個處に之れを見ることが出来る。彼は個人的 stockと社會的 stockとを “capital” 並びに「直接消費のため蓄へられたる stock」との二つの部分に分つてゐる。このスミスの述べた

ものしに用ひられる。かゝる説は貨幣の放下せられんとする、または既に放下せられたるものを資本であるとする古き陳套なる資本觀を有する者の云ひさうなことである。同じく少しく下の部分には「農業家の勞働する家畜並びに器具の價格または價值」及び「種子の價值」は農業家の資本の一部であるとしてゐる。然かも同節に於て「羊の群または家畜の群」はそれ自身を資本としてゐるのである。

若しスミスが自ら資本に加へたる、“stock” “trade”と殆んど同じ意義である新しい意味は、古い完成せられたる意味と相異なるものであることを認めたらば、彼は自説を固執したかどうか疑問である。さうしてまた異説を樹てないか、或ひは異説を明晰に説明したならば、これより起る多くの紛糾は生じないで済むだかも知れない。しかしそれはこの論文で取扱ふこと

るところは從來汎く行はれたる資本の概念とは嚴格に區別せらるべきものであることを示してゐる。即ち資本を放下せらるべき貨幣額または既に放下せられたる貨幣額であると云ふに代へて、スミスは物自身を資本であるとするものである。stock を獲得するために費したる貨幣額であるとする代りにスミスはそれ自身を以て資本の一部とするのである。然しこの變史は讀者に指摘せられてはゐない彼も極めて無意識に取扱つてゐる。彼は絶えず右い概念に専ら使用せんとする書き方に立歸つてゐる。即ち資本と非資本とに stock を區別したる後直ちに「財貨の耕作、製造、又は購入及び利得して再び之を販賣するために資本は使用せられる」べきことを述べてゐる。また資本は「土地の改良、事業上の有用なる器械並びに器具、または所有者を變へることなくして収入又は利潤を生ずる總ての

出來ない別な問題である。(完)

社會思想家としての

ウヰリアム・モリス (五)

加田 哲二

一三

「進化の緩慢と云ふ事を説く人達はイギリスの社會主義の發達を研究して見るといい。進化は緩慢だ。しかし其の度は一樣ではない。眠つてゐるやうな時期もあれば、突如として進んで行く時期もある。」(P. Kropotkin, Memoirs of A Revolutionist, P. 442 大杉榮氏譯本五四四頁) これはクロポトキンが千八百八十一年の新曆の十一月にトノンからロンドンに移つて、そこに一年間ばかり滞在して、社會主義運動の推勢を

見て下した断定である。洵に彼の云ふやうに、英國の社會主義は一八八〇年代に至つて、その眠りから覺めて、突如として進んで行つたのである。

英國社會主義運動の先達であるヘンリー・メイヤス・ハインドマンは云つてゐる。「千八百八十年の終から、千八百八十一年の始めに當つてグラッドストーン政府の内外におけるすべての民主主義的原理の明かな僞瞞に對して反對する眞に進歩的の男女を糾合して一の政黨を形成すべき努力をしなければならぬ」と云ふ感情が段々懷かれて來た。然し、問題となるのは、其の形を成せらるべき政黨の基礎についてであつた。當時の英國には有力な社會主義は存在してゐなかつた。……有識階級または勞働者が参考すべき文献もなく、英書では讀むべき書物さへもなかつた。最も進歩した革命家達の中であつた、印

(Reminiscences and Reflexions of a Mid and Late Victorian, 1918. pp. 70-71 尙ほ社會主義的思想への豫備的條件については、本誌第十五卷、第五、六兩號所載拙稿「八十年代の英國社會主義を参照せよ。)

斯くの如き思想界の劃時的變化の原因は勿論諸種の項目について述べる事が出来やう。けれども「若し此新思潮の發端を何等かの一事件に歸しなければならぬとすれば、一八八〇—二一年の間に、ヘンリー・デューヂ氏の「進歩と貧困」が、全英國に、廣く讀まれた一事を挙げなければならぬ。」(S. & B. Webb, History of Trade Unionism. 1920 ed. p. 375. 山川、荒畑兩氏譯本三九八頁)さうして「若しヘンリー・デューヂ氏が新運動に第一の衝動を與へたとすれば、これが進路を定めたものは、社會主義者の宣傳であつた。……カアル・マルクスが産業革命の影響

刷の悪い、マルクス・エンゲルスの千八百四十七年の共產黨宣言がやうやく求め得られる許りであつた。従つて英國の關する限りでは、社會主義運動は全然缺如してゐたと云ふても過言ではない。カアル・マルクスが組織立て、整頓し、科學的の基礎を與へたチャーチストの社會主義的概念も靜かに消え去り、さうして其の代りに何ものをも起らなかつた。彼等の指導者の名さへも忘れられてしまつた。當時の英國における少數の社會主義者達もお互に識るところがなかつたのである。」(H. M. Hyndman: The Record of an Adventurous Life, pp. 204-206.)然るに進化は飛躍を伴つた。アーネスト・ベルフォート・バックスの指摘するやうに「八十年代の初期は、英國思想界における一大變化の最高潮を劃した時期であつた。新しい時代の到來が甚だ顯著に感ぜられたのは實に當時のことであつた。」

を説明した有力なる記述は、思慮ある勞働者に、産業生活の日常の出來事に對する説明を與へてゐた。」(Webb, op. cit. p. 376. 譯本三九八頁)ヘンリー・デューヂの土地單稅論の宣傳とカアル・マルクスの科學的社會主義とから出發した英國の社會主義を實際運動化したのは、ヘンリー・エム・ハインドマンであつた。彼の思想はカアル・マルクス、ブロンテア・オブライエン、ベンジャミン・ヂスラエルの反自由主義、反資本主義の影響を受けてゐた。さうして彼の實際運動は千八百八十一年に始まつてゐる。彼は實際運動を行ふために、彼の思想に同情してゐると考へたエドワート・スペンサー・ビスリー教授、ヘレン・テイラー(ジエ・エス・ミルの繼女)ヨセフ・コーエン、ハアバート・ブロウス、其他チャーチストの首領株、國際勞働者協會の會員等と會談した。さうして一つの新しい結社を作ること

決したのである。彼はこの目的のために、彼の民主主義を表明するために一の宣言書、*England for all* を執筆した。この書は千八百八十一年六月に刊行されたもので、明かに社會民主主義への第一歩であつた。さうして同年六月八日に新結社創立者の會議が開かれて、そこで「民主主義聯盟」*Democratic Federation* が組織されたのである。けれども其の會員中の少數者だけが、その結社の目的について明瞭な考へを持つてゐるに過ぎなかつた。ハインドマンは「スペンス、オーエン、ステュフンス、オーストラア、オーコンナア、オブライエン、アーネスト・ジョンズ、ジョージ・ハアネーの大事業」を繼承する目的で無産階級運動を起す考へであつた。彼はマルクスとチャーチスト運動のことに就いて論議し、さうして彼にこの運動を復活せしむことは有利なるか如何を問ふた。マルクスは其の考へには

同情することが出来たけれども、其の實際化については疑問を持つてゐた。ハインドマンは、それにも拘らず、その事業に着手し始めた。さうして民主主義聯盟は次のやうな綱領を持つてゐた。(一)普通選挙、(二)三年制議會、(三)選挙區の公平なる區分、(四)議員に歳費を給すること、(五)選挙人の賄賂の受贈に對して刑事的刑罰を賦すること、(六)立法部としての貴族院の廢止、(七)愛蘭自治、(八)殖民地並に屬國の自治、(九)土地國有。これらの九項の要求を持つて民主主義聯盟はその宣傳を開始した。かくて社會主義的の氣運は英國に復活し出したのである。

ウヰリアム・モリスが社會主義への第一歩を踏み込んだのは、斯様な時期であつた。(Beer, *History of British Socialism*. Vol. II. pp. 246-247)

一三

モリスが社會主義者となつたのは、現代の商業主義への反抗の結果である。そは、人類の歴史の研究から、生命に對する熱愛から、さうして藝術的創作の衝動から起つた感情の具體化であつた。彼は、其の母校の牛津大學から *Honorary Fellow* に推薦せられたその日に、*Helferich* の民主主義聯盟へ加入した。時に千八百八十三年一月十三日の事であつた。彼は改宗の喜びを感じた。「私は眞實に社會主義的である唯一の結社に加入したことを心から喜ぶ」と。

民主主義聯盟に加入したモリスは、ハインドマンの最大の援助者となつた。民主主義聯盟の機關紙である「正義」*Justice* はエドワート・カーペンタアの補助によつて始められたが、その第一年における缺損はモリスがこれを補充した。彼は演

壇と街頭とで社會主義の講演を行ひ、街頭に立つて、社會主義宣傳の小冊子を販賣した。彼は民主主義聯盟のために其の全能力を傾倒した。彼が民主主義聯盟の會員であつた期間は僅かに二年間に過ぎなかつた。けれども「その民主主義聯盟の會員としての二年間には、この團體と直接關係のない出来事は寧ろ少かつたのである。さうして彼は、その團體の影響の下に、益々論理的な非妥協的な社會主義者になつて行つたのであつた。……彼が有力な會員として其の團體に加入した當時並に其の後に於いて、彼は製造家としての彼の職業と文學者として彼の地位を捨てたのではない。乍然、時の経過するに従つて、そは彼の時間と思想と精力との大部分を費してしまふやうになつた。彼の散文または韻文の純文學的創作は、この數年の間中絶した。彼の設計家としての製作は甚だしく縮少せられ

彼の執務は益々御役目的のものになつた。：：：さうして彼が再び想像的の創作、まだ政治的目的と政治的感激とを持つてゐた創作 The Dream of John Ball に歸つたのは三年後のことであつた。この三年間において數卷の著作をなした。けれどもそれは文學的價值を持ち、また永遠の目的で書かれたものでもない。數十の詩と藝術と社會状態、または人間の生活との交渉に關する多くの講演を除いては、それらは單なるジャーナリズムに過ぎない。(Mackail. Life. II. pp. 97-98)

モリスは何故に斯くの如く全心を社會主義運動に傾倒したか。それは彼が藝術と勞働と人生とが三位一體となる社會を理想としたからである。曰く、

「私は民衆藝術の問題が、社會の大部分の幸福または困窮を包含する一の社會問題であつ

はなすか」(Mackail. Life. II. pp. 105-106)

さうしてこの理想的な社會状態を齎らすものは社會主義を措いて他にない。彼はシー・イー・モオリスに與へた千八百八十三年六月二十二日附の書翰で、彼が政治的急進主義を捨て、社會主義を採ることを説明してゐる。

「私は嘗て普通の有産階級の急進主義的のことを爲すことによつて眞の社會主義的進歩が促進せられると考へてゐた。然るに近頃私は自分が誤まつてゐたと云ふ結論に到達した。急進主義は誤つてゐる。さうしてそれは急進主義以外のものに發展するものではない。事實之は有産階級によつて、有産階級のために作られ、常に富裕な資本家の支配の下にあるのである。彼等は其の政治的發達に對しては何等の異論はない。彼等は、必要と感ずる場合にその進行を阻止し得るからである。乍然、

たことを特に指摘したい。現代に民衆藝術のないと云ふことは、競争的商業が發生せしめる如く、人類を教養ある階級と墮落した階級とに分割することを示すと云ふ理由で遺憾のことであり、悲しむべきことである。吾々が富者と貧者との間の恐るべき溝梁を填めない間は、民衆藝術は健全な發達、否全然發達さへも遂げる機會はない。勿論多くのものが、之を填めるであらう。さうして藝術もこれらの多くのものの一つであるならば、吾々はこれを打ち捨てて置かう。すべての人が享樂出來ないやうな藝術に何の用があらう。：：：すべての政治並にすべての商業の眞の目的は何であらう。すべての人々が平和の生活を樂しみ、過度の心勞から免れ、彼等に愉快な仕事を持ち、さうして彼等の同胞に有益なものを生産し得るやうな状態を作ることが、その目的で

眞の社會的變革については、彼等がこれを補助し得る場合と雖も、之を許容しない。：：：私は民衆が政治的自由を持つてゐても、彼等がこれを合理的で、男性的な生活を送る道具として用ゐない以上は、無用のものであると信ずる。：：：この隸屬からの解放は、競争的商業の必然的產物である最低生活賃銀を民衆が受けてゐる間は齎らされることは出來ない。さうして私は勞働者が直ちにそのことを發見するだらうと考へざるを得ない。ヘンリー・デューヂの著書は英國においても米國においても新しい福音書として歓迎せられた。私は信ずる。社會主義は進行しつつあり、且つ教育の普及するに従つて益々發達するだらうと。かく信じてゐる私の義務は其の促進のためには自分の全力を盡すことである。それと同時に、如何なる方法によつても、數世紀間

の壓迫によつて養はれた困窮を軽減し、粗野を洗練することである」。(Mackail, Life, II. pp. 100-110)

越えて七月一日、モリスは再び書をモオリスに與へて、彼の社會主義者としての立場を詳細に説明するところがあつた。

「勿論私は制度によつて救はれた世界を信するものではない。たゞ私は腐敗して、何等の目的もない制度を攻撃するの必要を主張するのみである。現在の資本並に勞働の制度は此の場合であると思ふ。私のすべての講演で主張してゐるやうに、自分は、この制度のために藝術が阻害されてゐると云ふ結論に到達した。さうしてこの制度が存続するならば、それは文明から消え失せるであらうと思ふ。このことが私をして其の全制度を非難せしめた所以である。……貧富の對立には耐えること

る。富裕な人々をして、他人の勞働から出来るだけ多くの利潤を取得して生活を強要するやうな制度に其の基礎を置く社會は悪でなければならぬ。何となればそれは社會を文明と非文明の兩階級に二分してしまふことを意味するからである。私は無政府主義者ではない。けれども如何なる無政府状態でも今の状態よりは、ましである。それは無政府と專制との混合である。もしこの制度を征服すべき何等の希望がないならば、飲んで食はふ。さうして明日は死ぬのだ」。(Mackail, Life, II. p. 120)

モリスの態度は明白である。彼は革命的社會主義者となつた。彼自らもチャーレス・ロウレーに宛てた千八百八十三年十月二十五日附の書翰に書いてゐる。「自分は公然たる、さうして名乗りを上げた社會主義者だ。もう少し特殊に云へば自分は集産主義者である」。(Mackail, Life,

が出来ない。さうして貧富兩階級によつて耐ゆべきものではない。このことを感じてゐる自分にとつては、單に壓迫と障害とに過ぎない制度の破壊に對して活働するのは義務であると考へる。私は思ふ。斯様な制度は社會各員の結合的不満によつてのみ、破壊することが出来る。中流並に上流階級の少數個人の個別的行動はこの制度に對して甚だ無力のものである。換言すれば現制度の生んだ階級的脊反は、其の破壊に對する自然的にして必然的な手段である」。(Mackail, Life, II. pp. 112-113)

同じやうな精神で彼はホアスフォール氏に書き送つてゐる。

「貴君と私が熱心に望んでゐる生活の改善に着手する以前に、吾々は商業主義を其の根底から攻撃しなければならぬと私は確信す

H. P. Hill) 乍然、彼が社會主義者であると云ふことが世間一般に認められるやうになつたのは同年の十一月オックスフォード大學のラッセル俱樂部 the Russell Club の招聘を受けて大學の講堂において「藝術とデモクラシー」なる演題の下に講演したときに始まる。彼の講演を聴かうとして來た學生は講堂に充ちてゐた。モリスは社會主義的色彩の濃厚な講演の最後に彼は民主主義聯盟の代表者として講演したことを語り、聽衆に向つて聯盟に加入せんことを慫慂した。このために大學當事者との間に多少の物議を醸したのであるが、彼の社會主義者たることはこの一事件から一般世人に知れ渡つたのである。(Mackail, Life, II. pp. 124-127)

一四

モリスの加盟した當時の民主主義聯盟は、其の綱領において社會主義的であつたのは、土地

國有の一項のみであつた。けれども其の主要な會員は殆んど社會主義者であつた。エッチ・エム・ハインドマンのマルクシストたるは勿論のこと、ヘルフォート・バックスもハインドマンと共に英國におけるマルクス主義の最も早い解説者の一人であつた。この外にカアル・マルクスの娘であるエリアノール・マルクス、労働者で著名な社會主義者であるジョン・イー・ウキリアムス、ジキームス・マックドナルド、ハリイ・ケルシがゐた。彼等は一八八三年に「社會主義解説」Socialism made plain を發行した。この刊行部数は約十萬に上ると稱されてゐる。その中に含まれた思想は次のやうなものである。

社會的並に政治的權力は、其の同胞の労働によつて生活してゐた人々の手に獨占されてゐる。千八百三十二年までは地主が主權を握つてゐた。然るに千八百三十二年から千八百四十六

年までは地主は資本家と共同して社會的支配權を掌握してゐた。然し自由貿易に關しては互に其の態度が異つてゐた。千八百四十六年以後に於いては、彼等の間における差異は消滅し、相互にこの國を支配した。この支配の結果は何か。労働階級には貧困を、少數者には奢侈を、さうして愛蘭における失政と、印度の破滅を齎らした。合衆王國の年生産の價値は十三億磅に達する。この内十億磅は地代、利潤並に利子として少數者が取得し、三億磅だけが労働階級の所得となる。然るにすべての富は労働の結果なるが故に、それは労働の報酬でなければならぬ。この正當な要求も、生産手段が獨占されており、賃銀労働の制度が存続する間は實現することが出来ないであらう。故に吾等は生活の資源の社會化を要求する。富の生産は既に社會的性質を持つてゐる。それは協同労働の産物である。

今こゝに要求するところは、交換も分配も共に協同的基礎の上になければならぬと云ふことである。民主主義聯盟は、この見解を労働者階級中に普及するために設立されたものである。故に聯盟は次の如き要求を主張する。(一)地方

千八百八十四年一月機關紙「正義」Justice, the Organ of Social Democracy を發行する事になつた。(Beer, op. cit. pp. 247-249)

並に中央政府による保健的住宅の建設並に之を労働者階級に安價を以て貸與すること。(二)無料一般教育。小學兒童には少くとも一度の食事を供すること。(三)一日八時間労働制。(四)三百磅以上の所得に對する累進税。(五)國民銀行の設立と私立銀行の廢止。(六)鐵道並に土地の國有。(七)協同的原則によつて、國家的管理の下における失業者の組織。(八)國債の迅速なる償還。これらの綱領は其の設立當時のものに比して大いに面目を更めたと云はなければならぬ。かくして民主主義同盟はこの思想を宣傳すべく、エドワード・カーペンタアの援助の下に、

以上の小冊子に表はれ、またシドニー・ウェッブの指摘したやうに民主主義聯盟の採つてゐる思想は、其の經濟學においてはカアル・マルクスに従ひ、政治上においては民主主義的集産主義であつた。(Sidney Webb, Socialism in England, p. 31)

ウキリアム・モリスが社會主義者になつたのは藝術方面の動機であることは既に説くところがあつた。乍然彼もまたマルクスを研究した。彼はマルクスの資本論をその佛譯で讀んだのである。(Mackail, II, 104)けれども難解なマルクスの資本論は彼を悩ますことが頻りであつた。彼は云つてゐる、「私は社會主義の經濟的方面を知らうと努力した。さうして自分は資本論の經

知らうと努力した。さうして自分は資本論の經

濟學を讀んで頭腦混亂の苦痛を感じたが、それを讀んだ」。(Mackail, II, p. 85) モリスはまたマルクスの價值論についてグラスゴウにおける講演の中に語つてゐる。當時、講演會の座長を勤めたネルン(Nairne)と云ふ人が、モリスの講演が終るとモリスに對して、「貴君はマルクスの價值論を承認するか」と問ふたことがある。モリスは答へてゐる。「私は、マルクスの價值論を信ずるかと問はれた。正直に云へば、私はマルクスの價值論を知らない。また私はそれを知らうとも願はない。」と。さうして彼は續けて云つてゐる。「諸君、眞實のことを云へば、私はマルクスの學說を了解しやうと試みた。けれども經濟學は私の専門ではなく、さうしてその多くは私にとつては、あまりにつまらないものである。それにも拘らず私は社會主義者であることを希ふ。私にとつては遊んでゐる階級が富裕であ

り、さうして勞働する階級が貧困であり、富者が富裕なのは、彼等が貧者を奪掠するからだ云ふことが解りさへすれば、經濟學はそれで充分である。私は自分の眼でそれを見てゐるが故に知つてゐる。そのことを知るには、何も書物を読むことを要しない。この奪掠が所謂餘剩價値によつてであるか、奴隸または公然たる奪掠によつてなされるものであるかは自分にとつては大なる問題ではない。その全制度が殘忍にして許し難いものである。さうして吾々社會主義者がなさなければならぬことは、其の完全なる轉覆のために協働し、其の代りに主人も奴隸もなく、さうしてすべての人々が、すべての人々の善のために、隣人としてまた同胞として愉快に生活し、勞働するやうな制度を建設することである。要するに、これが自分の經濟學であり社會民主主義である」。(Bruce Glasier, William

Morris and the Early days of the Socialist Movement, p. 32)

この立場にあつたモリスと自ら純粹なマルクシストを以て任ずるハインドマンとは共に社會主義宣傳のために奮闘した。さうして彼等の旗幟を一層明瞭ならしめるために、千八百八十四年八月四日の第四回年次大會において、プロウス並にウリアムスの動議に基いて、會名を「民主主義聯盟」から「社會民主主義聯盟」Social Democratic Federation (S. D. F.) に變更した。民主主義聯盟の會員達は同年三月の終りまでは共に協同融和して社會主義の宣傳に務めたのであるが、その以後においては内部に徐々として龜裂が生じて來た。この龜裂はこの種の運動にはあり勝ちな個人的嫉視に始まつたのである。殊にハインドマンの氣質から起つたのであると云はれてゐる。乍然、この内部的の動搖は社會主義

宣傳の不成功殊に急進主義勞働者俱樂部が聯盟に加入することを拒絶したことや、聯盟の組成分子には議會主義的社會改良家、革命的社會民主主義者、非議會派社會主義者、無政府主義者などの種々雑多なものが包含されてゐた。これ等のことが既に内部的動搖の遠因をなしたと云つていゝのである。モリスは書いてゐる。「私が始めから豫期した時機が吾々のところへ來そうである。私は民主主義聯盟を分裂させるやうな内訌に加はることをさうして避けていいか判らない。吾々の多數はハインドマンを全然信用しない私は彼を信じやうとして全力を盡した。けれどもそれは無効であつた。さうして實際にはそれは彼と私との間の争闘になつて來たのである」。(Mackail, II, p. 133)

このことが八月に書かれてから間もなく一事件が起つた。それはエチンバラにおける少數の

社會主義者がシー・Andreas Scheu 氏の指導の下に一社會主義結社を作つたことである。アンドレアス・シューは自ら民主主義聯盟の會員でありながら、民主主義聯盟の一支部としないで、スコットランド土地並に勞働同盟 The Scottish Land and Labour League を設立した。そこでハインドマンは怒つて直ちにこの結社の解散を要求した。この結果ハインドマンに心よくなかつた人々は彼の専制を攻撃し出したのである。千八百八十四年も最早暮れなんとする時であつた。聯盟内ではアンドレアス・シューを中心としてハインドマン派と非ハインドマン派とが論戰の鎗を削つた。聯盟の分裂は避け難いものとなつた。モリスはクリスマスの前夜に書いてゐる。「私は聯盟を出てしまおう。吾々の仲間が自分に動かされて、一、二月も論争をして社會民主主義聯盟の名と「正義」とを得るのを價値のない

ことをした。ハインドマンはこれを自分の財産だと考へてゐるのだ。彼にそれをやつて何でも思ひ通りにさせるがよい。」かう決心したモリスの一派は社會民主主義聯盟を捨てるのに何等の未練もなかつた。モリスは十二月二十八日にマアトン・アペーから書いてゐる。「最後は遂に土曜日の夜に來た。私共は六時に始めて十時三十分に終つた。私は貴君に詳細なことを述べても別に興味のないことと思ふ。それに實を云ふと自分もそれには弱つてゐたので、全部書き下せるとも思つてゐない。ハインドマン派の人達をよく演説をした。ハインドマンは其の支持者を伴つて來た。彼等は少しも其の事件を知らないのに滔々と演説をやつた。最後にハインドマンは長い利口な、さうして法律家見たやうな演説をした。吾々は投票をした。さうして其の結果は豫期してゐたやうに、十に對する八で吾

々の側が二つの多數を占めた。そこで自分は立ち上つて討論中に滅茶々にされた自分の名譽と正直とについて二三の辯明を試み、更らに用意して來た吾々の辭任書を読み、さうして嚴肅に退場した。このことは三文文士の所謂「感情の激動」を起した如くであつた。ハインドマン派の多くの人達は私の周圍に來て、私に對して非常な好感を持つてゐること並にこんな酷いことを言つたのではないと云ふことを確めた。殊にあの可愛いウキリアムスは心から泣いて、吾々に最も丁寧な別れを告げた。勿論吾々が聯盟を去つたことは正當である。……吾々は今朝社會主義者同盟のために貧弱な事務所を借り、さうして數脚の椅子とテーブルを買ふことを委任した。だから私はもう一度青年のやうに自分の前にあるすべての困難と闘はうと思ふ。吾々は同盟創立の會合を明日の晚開く。今自分はこの

事柄について多くを語る力を持つてゐない。……乍然自分は、少しの間は小さな團體に過ぎないと思ふ新しい團體の中で出来るだけ一生懸命に働くことを約束す。」(Mackail, II. pp. 135-137)

かくの如くウキリアム・モリス一派が、半ば個人的問題から、半ば理論的問題(主として議會政策の問題)から社會民主主義聯盟から脱退して新たに「社會主義者同盟」 Socialist League を設立したのは、千八百八十四年十二月三十日のことであつた。(未完)

經濟史研究に就いて(五)

野村兼太郎

シユタムラーは更に同論文に於いて續いて次